312

Ⓢ

京都桂修學院離宮 仙洞御所 二條 御寫真及實測圖集

第卅六集

京都 仙洞御所、二條桂、修學院離宮 御寫眞及實測圖集 第三十六集（終刊）目次

二條離宮之部

(143) 二條離宮　巽櫓
離宮東南隅なる櫓にして堀川通より仰ぎ見るべし。

(144) 二條離宮　大廣間上段書院障子
黑塗緣組子竪重、腰張金地に蘭の繪あり。

(145) 二條離宮　大廣間鷹の間天井及黑書院三の間天井
黑書院二の間三の間は天井文樣ほゞ同一なるも、少異ありて地文に網代あると無きとあり。

(146) 二條離宮　黑書院上段天井隅
黑書院上段と下段との間、天井より下ヶ壁ありて其端に無目鴨居あり、御簾釘を打つ、下ヶ壁の裝飾は樓閣山水圖にして全部長押下部の圖樣には介意せざる如し。

(扉) 二條離宮　大手門外景
仙洞御所御寫眞及實測圖（題字）
修學院離宮御寫眞及實測圖（同）
共に前內匠頭東久世男爵閣下の揮毫せられたる所なり。

二條離宮　解說　八頁
同　目次　五枚

二條離宮御寫眞及實測圖整幀順序

整幀圖版番號	圖版關係番號	左頁圖版番號	圖版題名及集
			扉　東大手門
			唐門及車寄　目次
			遠侍及式臺　目次—36
1	143		巽櫓—36
2	1		唐門—25
3	2	〃	詳細—25
4	3	〃	妻詳細—25
5	76	〃	裝飾一部　內側左—29
6	118	〃	〃　〃　右—32
7	77	〃	〃　外側右—29
8	119	〃	〃　〃　左—32
9	101	〃	細部—31
10	102	〃	〃　—31
11	4		車寄全景—25
12	5		車寄—25
13	6	〃	欄間正面彫刻—25
14	7	〃	〃　左側　〃　—25
15	8	〃	〃　右側　〃　—25
16	104		內玄關屋根瓦獅子左—31
17	103	〃	右—31
18	…		遠侍及式臺　平面—30(圖)
19	44		遠侍　勅使の間　床—27
20	128	〃	〃　床脇袋棚小襖—33
21	45	〃	〃　帳臺—27
22	88	〃	〃　南側—30
23	87	〃	〃　西側—30
24	89	〃	一の間より勅使の間を見る—30
25	141	〃	勅使の間　障子—34
26	142	〃	〃　〃　—34
27	21	〃	一の間東北隅—26
28	42	〃	〃　東側—27
29	43	〃	〃　天井—27
30	20	〃	二の間東北部—26
31	105	〃	〃　北側欄間—31
32	41	〃	三の間北側—27
33	40	〃	〃　東側—27
34	91	〃	柳の間西側襖—30
35	78	〃	〃　障子—29
36	39	〃	〃　若松の間—27
37	79	〃	〃　天井—29
38	90	〃	芙蓉の間—30
39	46	〃	北側外觀—27
40	92	〃	妻—30
41	47		式臺の間　獅子繪杉戸—27
42	48	〃	〃　—27
43	80	〃	—29
44	129	〃	より大廣間を見る—33
45	110	〃	天井—31
46	130	〃	西側杉戸鶴繪—33
47	93		老中の間　一—30
48	22	〃	二—26
49	81	〃	三—29
50	131	〃	廣椽—33
			大廣間目次
51	…		大廣間　平面—30(圖)
52	23	〃	上段—26
53	50	〃	〃　床正面—27
54	144	〃	〃　書院障子—36
55	24	〃	〃　床脇棚及帳臺—26
56	51	〃	〃　床脇棚—27
57	132	〃	〃　〃　小襖—33
58	133	〃	〃　〃　違棚金具—33
59	52	〃	〃　帳臺—27
60	53	〃	〃　東側壁面—27
61	58	〃	〃　帳臺內部東側壁貼—28
62	59	〃	〃　帳臺內部南側壁貼—28
63	94	〃	〃　西側壁面—30
64	112	〃	一の間天井及遠侍勅使の間天井—31
65	95	〃	下段西側壁面—30
66	25	〃	上段より二の間を見る—26
67	54	〃	二の間東側壁面—27
68	120	〃	〃　欄間彫刻—32
69	60	〃	〃　壁貼孔雀—28
70	111	〃	〃　天井—31
71	55	〃	三の間北側壁面—27
72	121	〃	〃　〃　欄間彫刻—32
73	62	〃	〃　〃　壁張孔雀—28
74	61	〃	二の間西南隅より三の間を望む—28
75	26	〃	鷹の間西南部—26
76	63	〃	〃　南側—28
77	64		大廣間　鷹の間　西側北寄壁面—28
78	65	〃	〃　〃　南寄側面—28
79	145	〃	〃　天井及黑書院三の間天井—36
80	106	〃	廣椽欄間彫刻—31
81	107	〃	〃　—31
82	84		蘇鐵の間—29
83	57		黑書院より大廣間を見る—27
84	97		大廣間南立面—30
85	96	〃	妻—30
86	49		遠侍より大廣間を見る—27
87	82		大廣間前御庭—29
			黑書院目次
88	…		黑書院　平面—29(圖)
89	30	〃	床—26
90	66	〃	上段床脇棚—28
91	122	〃	〃　小襖—32
92	31	〃	〃　帳臺—26
93	134	〃	〃　書院障子(左)—33
94	135	〃	〃　〃　(右)—33
95	113	〃	〃　天井—31
96	146	〃	〃　天井隅—36
97	108	〃	帳臺內部壁貼—31
98	69	〃	二の間東側—28
99	68	〃	〃　北側壁貼—28
100	114	〃	〃　天井—31
101	67	〃	上段より二の間三の間を見る—28
102	29	〃	三の間西北隅—26
103	85	〃	三の間より上段を見る—29
104	32	〃	菊の間南側襖—26
105	70	〃	〃　西側壁面—28
106	123	〃	〃　北側—32
107	115	〃	〃　天井—31
108	28	〃	牡丹の間—26
109	71	〃	〃　北側東寄壁張—28
110	72	〃	濡れ鷺杉戸—28
111	73	〃	〃　—28
112	74	〃	南側廊下杉戸朝顏繪—28
113	33	〃	外部—26
114	98	〃	妻—30
115	56		大廣間より黑書院を見る—27
			白書院目次
116	…		白書院平面—28(圖)
117	9	〃	西立面—25
118	10	〃	一の間床—25
119	136	〃	〃　床脇棚小襖—33
120	11	〃	〃　床脇棚—25
121	99	〃	〃　帳臺—30
122	13	〃	〃　〃　上部欄間繪—25
123	12	〃	〃　より二の間を望む—25
124	14	〃	〃　南側襖—25
125	116	〃	〃　天井—31
126	137	〃	〃　書院障子腰(左)—33
127	138	〃	〃　〃　(右)—33
128	15	〃	〃　書院外部—25
129	139	〃	〃　西椽杉戸糸櫻繪—33
130	16	〃	二の間より一の間を望む—25
131	35	〃	二の間東側襖—26
132	34	〃	〃　北側襖—26
133	124	〃	〃　西側—32
134	86	〃	〃　南側椽杉戸—29
135	36	〃	三の間西北部—26
136	75	〃	三の間西側襖—28
137	125	〃	〃　東側—32
138	126	〃	〃　北側—32
139	117	〃	二の間三の間天井—31
140	37	〃	四の間西側壁面—26
141	38	〃	〃　睡雀繪原寸—26
142	17	〃	〃　南側襖—25
143	140	〃	妻—33
144	127		大廣間東北隅より白書院を望む—32
			御苑目次
145	…		御苑平面—36(圖)
146	18		御苑より御殿を望む—25
147	19		御殿外部—25
148	27		御苑背部より御殿を望む—26
149	100		御苑南方より見る—30
150	83	〃	瀧—29
151	109	〃	舊瀧口—31
152	…		白書院南側立面—30(圖)
153	…		二條離宮南側立面—29(圖)
154	…	〃	同西側立面—32(圖)

會報

○いよ〳〵此集で完結となりました、昭和三年五月第一集を出してから今日まで長い間の努力が漸く實のつた譯です、爰に後援諸先生、協賛會員諸氏及貳百の會員諸氏に謹んで御禮を申上げます。

○さて、次に本會がたどり行く研究の標的に就いて、最初は京都御所紫宸殿其他を續けて內裏建築の研究に從ふ考でありましたが、本年二月出願後何の御沙汰もなく、其儘になつて居りますので、關野貞先生に御願して他の方針を採る事と致しました、先生から一二の御提案を得ましたので、相談の結果、**藤原時代の建築**を主題とし、時代を横に切つて全國に現存する二十三の遺構に就き撮影實測を遂行することに致します、私共は七八兩月を其準備に充てゝ働きます。

○整幀合本の御便宜に二條離宮の見出しを左に掲げます。本會として合本裝釘は漸く決定見本を製作しました別欄で御報いたします。

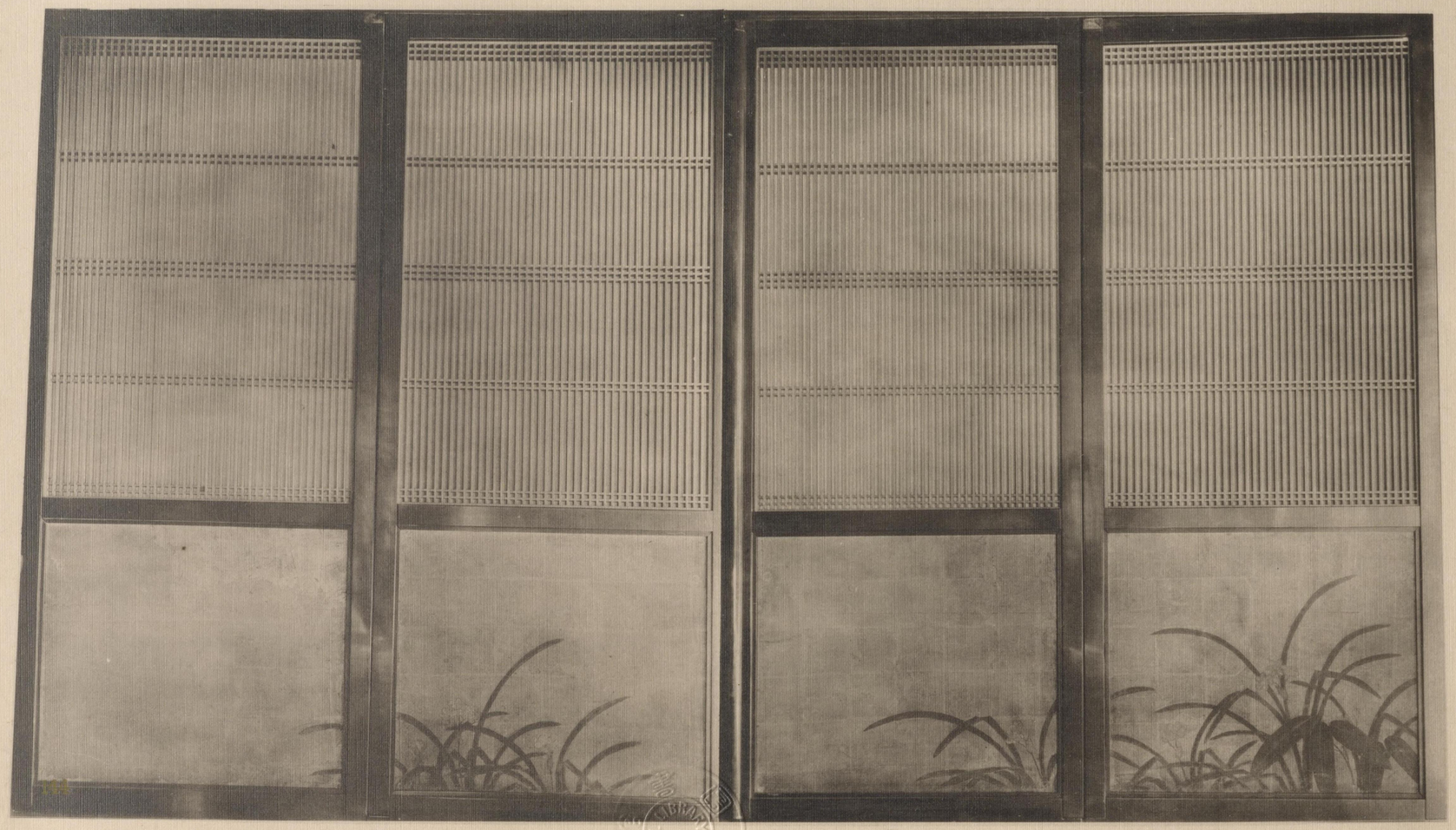
昭和七年七月十日印刷
同　年七月十九日發行

編輯發行兼印刷者　川上邦基
東京府豐多摩郡代々幡町代々木初臺七一九番地

發行所　古建築及庭園研究會
東京市外代々木初臺七一九番地
電話四谷(35)六四六二番
振替東京六九三四番

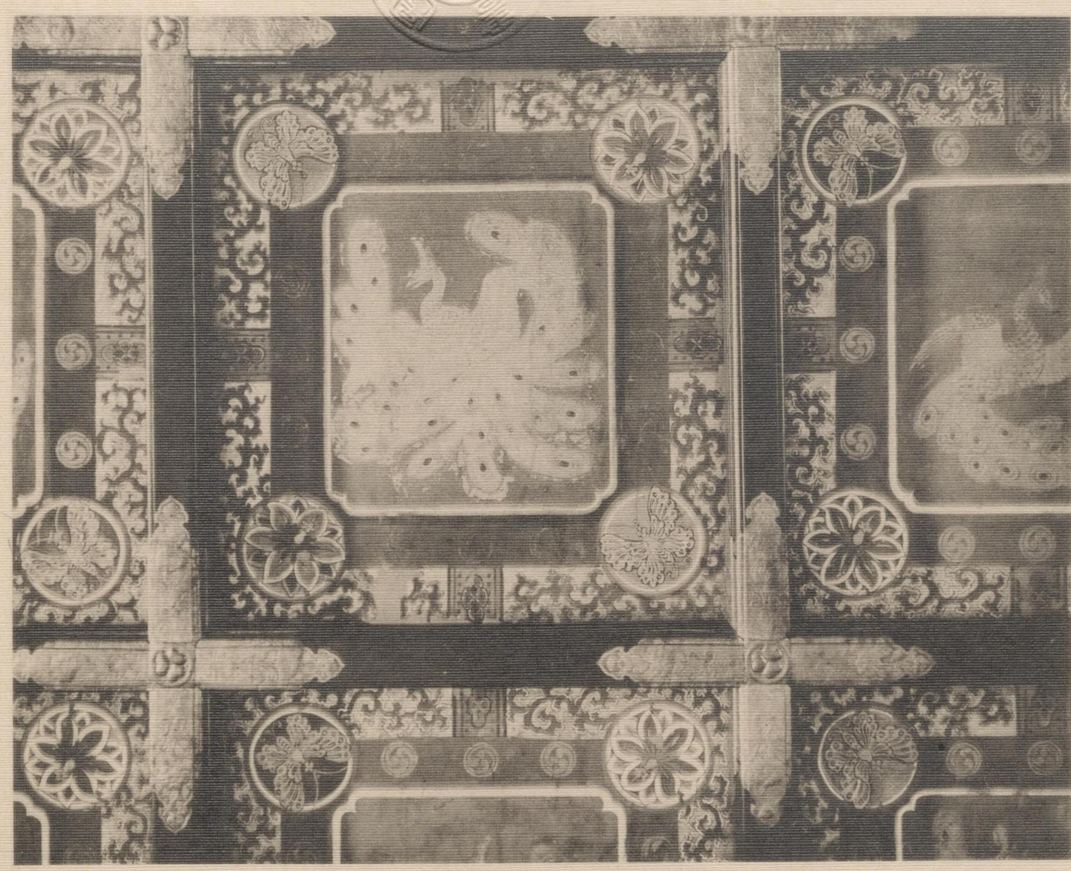
注意
本圖集は定價を以て賣買する事を禁ぜらる。收輯の圖版は宮內省の御許可なく轉載複製又は改竄轉寫する事を得ず。(尙著作權者の同意を要す)

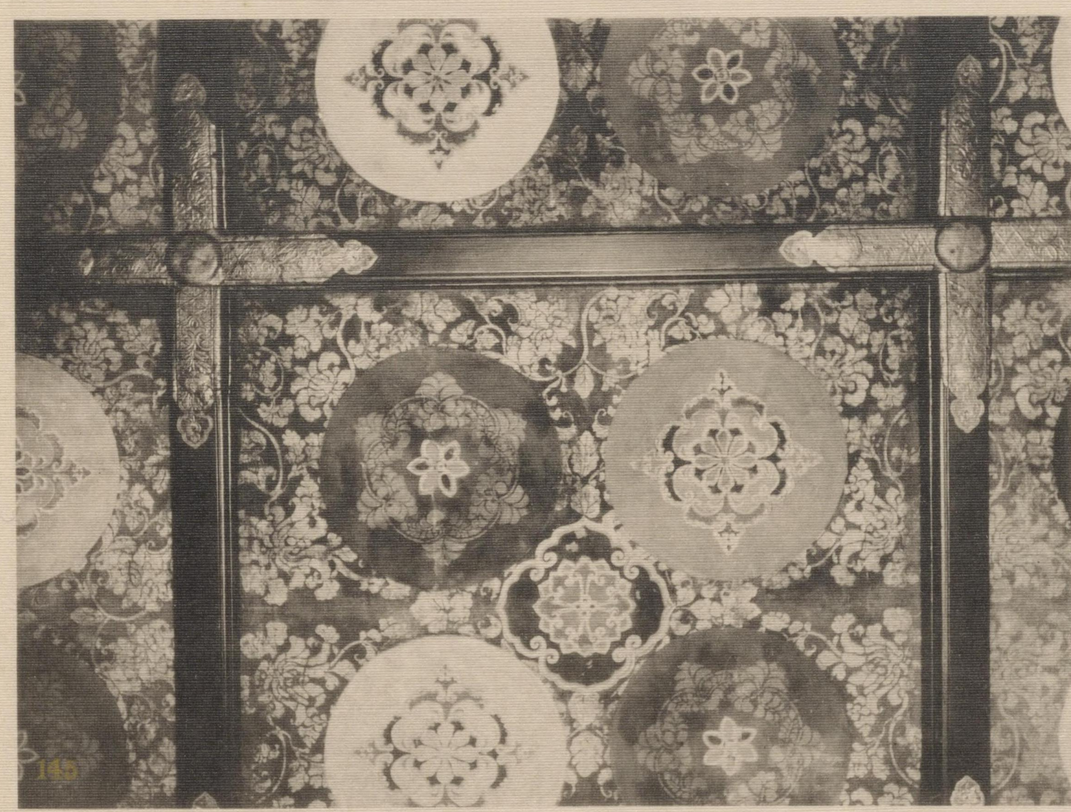
二條離宮　巽櫓
Out side view of Nijô Detached Palace.



二條離宮　大廣間附書院　障子

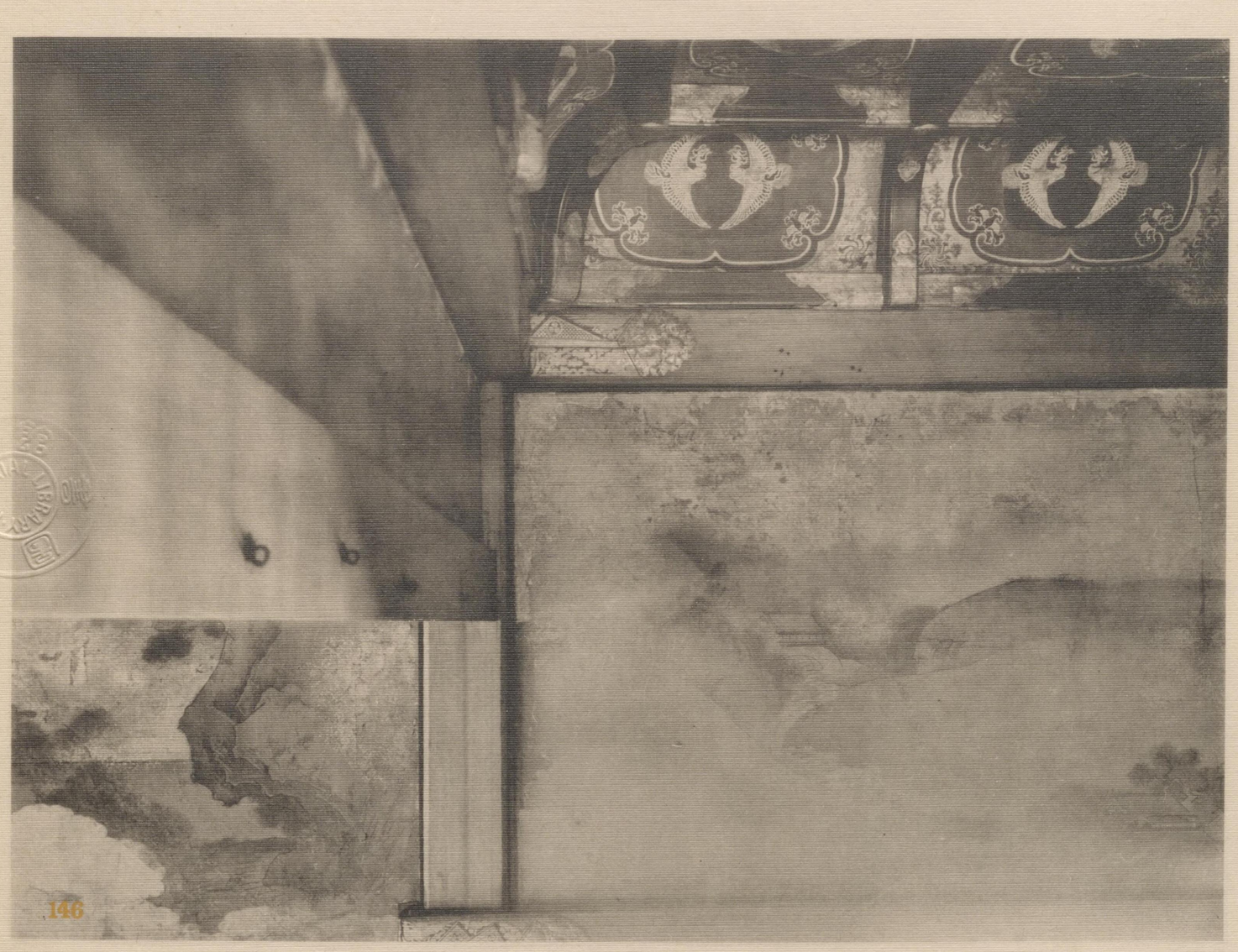
Paches on paper-slides, *Ô-hirona*, Nijô Detached Palace.





二條離宮　大廣間　鷹の間天井（上）及黒書院　三の間天井（下）

Ceiling decorations of the *Taka-no-ma*, *Ô-hiroma* (upper), and the 3rd room of *Kuro-shoin*, Nijô Detached Palace.

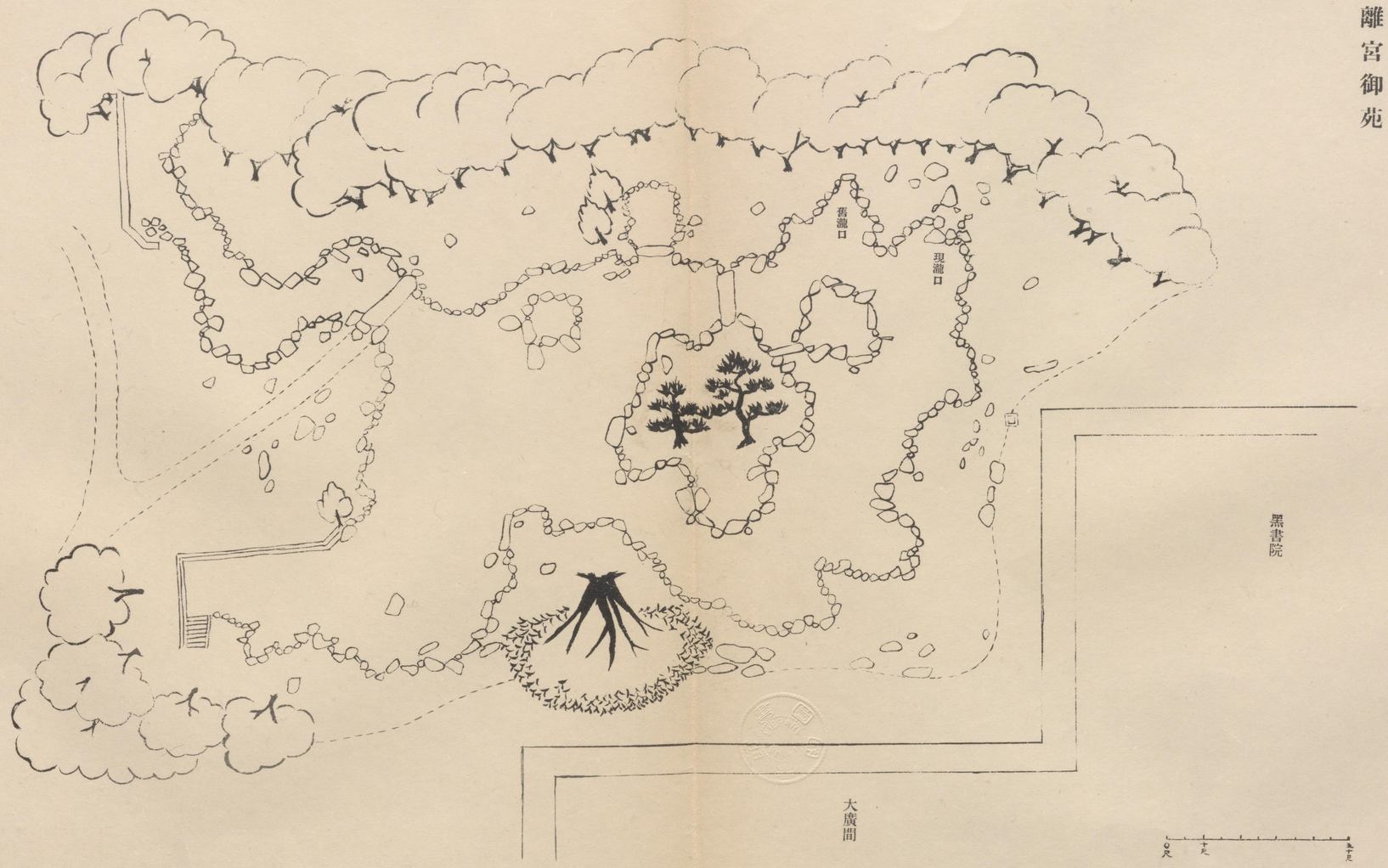


IMPERIAL LIBRARY TOKYO

二條離宮　黒書院　上段　天井隅

A corner of ceiling, 1st room of *Kuro-shoin*, Nijô Detached Palace.

二條離宮御苑



二條離宮
御寫眞及實測圖

帝國圖書館 IMPERIAL LIBRARY

例言

一 本書は宮內省の御許可を得て、昭和六年春より同七年初夏まで屢次、二條離宮に參進して撮影實測したる所なり。

一 本書姉妹篇として、仙洞御所、桂及修學院離宮の三部あり、以て京都離宮の全豹に涉るものとす。

一 工學士大岡實君は實測製圖に、また加藤得二君は製圖に、勘からぬ助力を與へられたり、記して感謝の意を表す。

一 執拗なる努力を續けて今漸く本書成る、聊か學界を益する所あらば幸甚矣。

昭和七年七月

川上邦基識

THE IMPERIAL LIBRARY TOKYO

仙洞御所御寫眞及實測圖

秀亭

例言

一本書は宮内省の御許可を得て、昭和三年より十數次、仙洞御所に參進して撮影實測したる所なり。

一本書姉妹篇として、二條、桂及修學院離宮の三部あり、以て京都離宮の全豹に涉るものとす。

一前内匠頭男爵東久世秀雄閣下が、本書のため題字を揮毫せられたるは、予が最も光榮とする所なり、特記して感謝の意を表す。

一工學士大岡實君は實測製圖に尠からぬ助力を與へられたり、記して感謝の意を表す。

一執拗なる努力を續けて今漸く本書成る、聊か學界を益する所あらば幸甚矣。

昭和七年春四月

川上邦基識

修學院離宮御寫眞及實測圖

秀亨

例言

一 本書は宮內省の御許可を得て、昭和四年十二月より同六年一月まで數十次、修學院離宮に參進して撮影實測したる所なり。

一 本書姉妹篇として、仙洞御所、二條及桂離宮の三部あり、以て京都離宮の全豹に涉るものとす。

一 前內匠頭男爵東久世秀雄閣下が、本書のため題字を揮毫せられたるは、予が最も光榮とする所なり、特記して感謝の意を表す。

一 工學士大岡實君は實測製圖に、また加藤得二君は製圖に、尠からぬ助力を與へられたり、記して感謝の意を表す。

一 執拗なる努力を續けて今漸く本書成る、聊か學界を益する所あらば幸甚矣。

昭和七年春四月

川上邦基識

二條離宮御寫眞及實測圖

序　說

二條離宮は京都市二條堀川西にありて、往昔の桃花坊教業坊に跨り、北は大炊御門より南は押小路に至り、東は堀川より西は柳筒に至る、地形凸字形をなし其底邊を東面し上半即ち西部を本丸とし下半即ち東部を二の丸とす、其創始に就いては、時に之れを織田信長となすものあれども、誤れるの甚しきものにして、德川家康が覇業成れると共に着手したること言を俟たず。

「德川實記」には「古人物語」を引きて

慶長六年十二月關西の諸大名に課して京二條を營築せしむ

と記し、「嘉良喜隨筆」は「遠碧軒隨筆」延寶八年二月起草の一册を拔萃して

（慶長）七年壬寅四月廿八日、大阪より家康公御歸、禁中にて御能あり、京都の御座所平屋敷にて要害宜からず假に城郭を構へ、御在京の折々休息なさるべき迚、二條堀河西神泉苑の北に、四丁四方に城を築んとて、諸大名に被仰付繩張をなされ、五月三日伏見城へ還玉ふ、二條の御所と世人二條城を稱しきと也。

とあり、慶長七八兩年に涉り、板倉勝重を主として其創設に當らしめしも、當時の規模は城廓といはんよりはむしろ邸舍にして、其稱呼も二條城といはずして、もとの武衛陣二條新御所及び二條第に近く所在せしより、同じく二條御所また二條第と稱せるが如し。「故老茶話」に

二條の城といふは假令城といふ迄の事にして屋形也

と記せり。また「德川實記」に

（慶長）八年三月廿一日伏見城より御入洛ありて二條の新御所に入らせ給ふ（去年聚樂の御館を二條に引移さるこれを二條の新御所又は新屋敷と稱すいまの二條城なり）

と記し、「超えて三月廿七日、勅使二條城に至りて將軍宣下あり太刀馬代を賜ひ、親王公卿また二條城に來賀せりの記事あり。

爾來將軍入洛の都度、伏見城と共に其宿舍となりて慶長元和の間には可なり修築の業を進めしが、寛永元年

二月

明後年又兩御所御上洛ありて、二條城へ主上行幸の御あらましあれば、城中殿閣構造あるべし、こと更玉座は金銀の具を用ゆべしとて、使番中川半左衛門、野々村四郎右衛門某、榊原左衛門佐職直、水野河内守守信、其奉行命ぜられ、石疊助役は尾紀の兩卿、松平隱岐守定勝、井伊掃部頭直孝、本多美濃守忠政、松平下總守忠明、本多中務大輔忠刻、小笠原右近大夫忠眞、松平河内守貴行、水野日向守勝成、本多甲斐守政朝、松平飛彈守忠隆、松平山城守忠國、松平甲斐守忠良、松平周防守康重、岡部内膳正長盛、松平紀伊守家信、松平右近將監成重、菅沼織部正定芳に課せらる。（德川實記）

また「元年九月小堀遠江守政一は二條城行幸御所の構造を奉行せしめらる、青木次郎右衛門直澄同じ構造の事奉はる」とあり、また同じ年「五味金右衛門豐直は同城本丸作事奉行、喜多見四郎左衛門勝忠は堺攝河泉の奉行にて兼勤む」とあり、恐らくは當時造築の巧者を集めて所謂二條城の壯觀を完成し、寛永三年、秀忠は六月、家康は八月、前後入洛して、後水尾天皇の行幸を奏請し、九月天皇親しく二條城に行幸あらせられ、前古ためしなき盛儀を展開せりと傳ふ、實に「主上御膳具みな黄金を用ひ、中宮、女院、姫宮がたの御調度は金銀をまじへもちひらる」「小堀遠江守政一は金銀の御調度共を奉行して作進せしとぞ」等以て其一汎を覗ふに足るものあり。

然るにこの盛事終るや、翌四年八月には「二條城の唐門を金地院崇傳にたまはり南禪寺へ引移さしめらる」とありて、早くも建物の移動あり、また其翌五年には、御幸御殿をはじめ二三の殿舍を仙洞御造營のために献じたりと傳へらる、これ恐らくは寛永行幸のために假設せる建造物を除去整理したるにあらざるかと考へらる。

其後寛永十一年、家光上洛して、こゝに駐蹕せしが、此際に於ては、小堀遠洲をして茶室を構作せしめし外記錄なく、其後萬治三年四月の大風雨、寛文二年五月十二月兩度の大地震等によりて各部相當の被害あり、本多下總守俊次、戸田采女正氏信をして夫々修理せしめしも、寛文六年五月の大地震には石垣及二の丸殿舍に被害ありしに係らず、之れが修理の記錄なく、寛延三年に至りて八月廿六日夜、本丸天守に落雷ありて之れを燒失せしにより、使番柘植三四郎影正をして巡察せしめたる記事あり、再建の議もなかりしが、天明八年正月の大火は、本丸の殿舍を舉げて烏有に歸せしめ、辛うじて二の丸の殿舍を殘せしが其後將軍家茂が文久三年の上洛までは、たゞ番士の守りに委ねたるものゝ如し。

明治維新に於ては、元年二月三日、明治天皇親しくこゝに臨幸ありて御親征の詔を頒ち給へりといふ、其後ひとたび京都府の假廳舍となり、また陸軍の管轄となり、終に明治十七年七月改めて離宮に指定せられ、大いに修理を加へて以て今日に至れり。此間明治二十六年、御所今出川御門内にありし桂宮御邸を本丸遺趾に移築せられたることあり。

要するに德川氏築城の目的が武威耀揚にありしを以て、其殿舍は瑰麗を主とし、光彩陸離、人目を眩惑するものあり、現存する二の丸の外若しそれ本丸に於ける天守以下の殿舍が現存せりとせば、其壯觀は如何ばかりぞや、蓋し想像に難からず。

現在拜觀を許さるゝは二の丸にして、東に大手門あり西は橋梁を以て本丸に通じ、圍繞するに堞渠石垣を以てす、五棟の殿舍其中に在りて、東南より西北に連る、古圖を按ずるに、なほ幾多の建物ありしが、時に隨ひてこれを整理し、專ら其主要なるものを限りて保存せられたるが如し、以下序を逐ひて其結構を記さん。

唐門及御車寄

東大手門を入りて詰所より南に西に唐門あり、また鑰石門といふ、南面す、二の丸殿舍の正門にして其用材は盡く櫟を用ひ、檜皮を以て葺く、甃石より棟上バまで高さ三十三尺八寸餘あり、裝飾彫刻は盡く金銀五彩を施し、豪健華麗を極む。これを入りて正面御車寄あり、同じく南面す、形式ほゞ唐門に似たり、正面欄間に彫刻あり中央唐松、牡丹、竹、鳳凰、左右は洲濱形のうちに松竹梅に鷹（右）芍藥に鳥（左）を彫み、また蛙股の中には獅子を彫めり、皆極彩色とす。御車寄内部は一面に甃石を敷き、階數段を踏みて昇殿すべき也。

遠侍

第一の殿舍を假りに遠侍とよぶ、其平面に見るが如く上段また勅使の間二十四帖、下段三十五帖、次で遠侍一の間また殿上の間とよぶ九十五帖あり、遠侍二、三及柳の間を合せて百帖にあまり、他に若松、芙蓉の二間あり て五十帖を算すべし、惣建坪三百四十餘、五棟の殿舍中最大のものとす。いま拜觀の序によりて御車寄より柳の間に入れば、東と北の襖に流水に柳の繪あり、圖は南と北の障子腰張に伸びて四顧一樣に柳樹を繞らせり、

遠侍口の間と考へらる。其次遠侍三の間及び二の間の稱あり、柳の間と合せて三間同一の格天井を張り間仕切は襖上部に簡單なる彫刻あるのみ。柳の間の奥に若松の間其次に芙蓉の間あり、各其周圍の裝飾畫によりて呼稱せらる若松の間の天井は葡萄の繪にして、他の各室に於けるが如き模樣式圖案を離れ、ひとり自由なる構圖をなして其天井格組が自づと葡萄棚の如き觀をなせり、これに反して芙蓉の間は簡粗なる竿椽天井とす。

此殿舍は勅使來向の節其使館として用ひられしが如く、遠侍一の間は殿上の間の稱あり、其裝飾は二の間三の間と均しく竹に虎の繪あり、二の間と之れを前後より見るに兩面其圖樣を異にす、勅使の間は其奥にありて、正面床脇棚あり松に牡丹の彫刻あり、西面す、右方御帳臺あり、其に楓樹を繪きて裝飾す、袋棚の小襖には梅、櫻、山吹、芙蓉の繪あり、欅材の框によりて仕切られたる下段の壁面には縱の樹の繪ありて殿上の間に續き、其欄間には松、牡丹等を彫めり、北方障子の腰張は壁面裝飾畫とは何等の連絡なく梅、桃等を描けり。御帳臺の内部が、全然他に通路なきも他の殿舍と異る所にして、恐らくは實用せられざりしなるべし。南方及西方の廊下は所謂鶯張りにして他の二面は普通板張りなり、其天井欄間等は明治時代の修補に成れり、然れども明障子上部の欄間は千本格子に花菱形の彩色彫刻を嵌し、其盡くが花鳥の圖樣にしてまた其盡くが圖樣を異にするは鶯嘆の外なく他の殿舍と共に數百を算すべきなり。御車寄を入りて右方東面して昇降口あり其屋上に獅子の飾瓦を置く、他の殿舍に見ざる所なるを以て或は後補のものかとも考へらるれども其姿態の彫鏤は決して凡作にあらず。屋蓋破風の壯大なるは其裝飾金具と共に一偉觀たり、いま燦たる御紋章を以てすれども往昔は三ツ葉葵のかゞやけるなるべし。

式臺

第一の殿舍の西に連れるを假りに式臺と呼ぶ、式臺の間四十五帖を主として其裏に老中の間、同二の間、同三の間各十二帖を包含する一棟にして約百坪にあり、周圍に鶯張りの廣椽をめぐらせり。

遠侍の東椽より式臺に行くところ杉戸ありて、竹に虎の繪あり、これを開きて式臺に入る、其杉戸の裏面「まむきの獅子」あり、二條離宮三名畫の一に數へらる、八方睨みの獅子として名高し。式臺の間は朝武の使者挨拶を交す所よりの稱呼にして、南面す、北側壁面は金地に大松樹を描けり、其裏面に老中の間三あり、老中詰所に用

ひられたるが如し、この三室ともに竿椽天井とす、遠侍と式臺とに用ひられし障子は共にこまかき竪繁の組子にして、腰張に彩畫あり、遠侍勅使の間とこの式臺の間とは、壁面裝飾に關る所なき繪樣のものを用ふ、傳說に桃山城より移撤せりと云ふ所のものなりや、いかに。

大廣間

次なる建物をこゝに大廣間といふ、將軍晴れの接見に用ひし所にして、大廣間五十帖を主とし、二の間、三の間四の間等を合せて約百九十坪、遠侍に次ぐ建物なり。

式臺より進みて先づ三の間四十帖あり、南面す、壁面はすべて金地に大松樹を描けり、四の間との界欄間は、牡丹、松、孔雀等を彫みて、之れに五彩を施せり、二の間との界欄間にも、牡丹、鳳凰等同樣式の彫刻あり、共に表裏圖樣を異にせり、二の間四十四帖に進みて遙かに一の間上段を見るに四面煌たる金壁は眼眩せむばかりにして、之れに巨松の枝を張り葉を茂らす、桃山期藝術の豪華雄大を語る前、まづ上段に將軍の座あり、諸將綺羅星の如く居並べる光景を幻想して嗟嘆久之せざる可からず。さて二の間は壁面裝飾に松と孔雀とを描き、天井格の間は群青地に金にて網崩し其中に花文を描けり、三の間の天井も同樣なり。

大廣間上段は西面す、正面三間の床は欅一枚板にして厚六寸を超ゆ、壁張付は巨松を描けり、天井は二重折上格天井にして格の間は金地唐花模樣を描けり、床脇棚の上部は袋棚にして、其小襖には水仙牡丹芙蓉菊の繪あり、其下違棚、壁面には竹の繪あり、床の左方附書院あり、天板は欅にして四枚の障子建つ、腰には水仙の繪あり、御帳臺襖の緣其他は黑塗にしてこれに金色の金具を附す、襖の繪は錦雞に花卉を配せり、帳臺內部は十四帖疊敷にして、周圍壁面には風俗圖あり、もとは花鳥等の張付ありしを、明治年間いづこかの御襖に張付ありし風俗圖を以て修補せられたるが如し、北方廊下に出入口を設く。御殿內釘隱は遠侍と式臺とに用ひられしとは異りて、大なる熨斗形を使用せり、其形狀と圖案材料とはいづれも同一なれども其圖樣は皆異れり。黑書院亦同じ。四の間七十五疊は東北隅にあり、壁面裝飾に松と鷹とを繪けるによりて鷹の間の稱あり、三の間との界に彫刻の欄間あり。この鷹の間の東廊下より直ちに式臺老中の間の北廊下に續く。

大廣間御床の裏より次なる殿舍への渡りあり、疊を用ひず、もと壁面に蘇鐵を描きしより今に蘇鐵の間の稱あり、明治初年京都府廳舍たりし時こゝにて雜務を執りし由なるが、ために金壁蘇鐵繪は殘りなく荒れはて

しかば、近年金無地に改められ、僅かに大廣間寄りの杉戸に蘇鐵を殘せり、これを過ぎて次なる殿舍に入る、

黒書院

將軍常の接見に用ひし黒書院を主とし、二の間、三の間、四の間また菊の間其他を爰に黒書院といふ百七十坪にあまれり。

蘇鐵の間より杉戸を入れば、牡丹の間あり、疊を用ひざれども優に六十帖を超ゆべし、西北面に牡丹の繪を裝飾するに依りての名なり、東面明障子の隔壁には梅の繪あり、南面せる三の間前にいづる所杉戸ありて花籠を描く、其表は「ぬれ鷺の杉戸」として二條三名畫の一に數へらるゝ、泊舟雨鷺の圖を描けり、舟も雨も既に湮滅していまは濡れ鷺をのみ見ることを得べし。三の間三十五帖、海邊松樹、白鷺等の繪ありて大廣間に比し多少の和らぎあるかに感ぜらる、天井格の間丸紋模樣、二の間との界欄間は、纖巧なる切拔格子を嵌す、次ぎに二の間あり、惣じて豐麗優美、これを大廣間の豪壯雄大に比すべからず、一の間は黒塗框を以て上段を劃し、正面床樑の巨材を用ふること大廣間に同じ、松に鳥の繪あり、其右方脇棚、折曲りてまた棚あり、正面のものは床の繪延びて柴垣となり、西面するものには蘭の繪あり、上部は共に袋棚ありて、山水樓閣の圖あり、床の左方付書院あり、障子腰にまた山水繪を貼る、御帳臺の襖は櫻に山鳥を繪き、櫻は長押上に延長して東側の全壁面を占むれども、他方は下部の裝飾に係らず山水樓閣圖を以てせり、帳臺内部十四帖、風俗繪を以て修補せらるゝこと大廣間に同じ。一の間天井は二重折上格天井にして格の間の繪は萠黄地向ひ鳥なり、二の間は丸紋三の間も同樣なれども其地文に少差あり。

四の間また菊の間といふ、四壁流水に菊の繪あり、長押上部には薄に扇散らしを描き、天井格の間に紗綾形丸文を描く、各殿舍のいづれもが豪華と雄麗とに充ちて、どことなく武家風流のおもひありしに、いま菊の間を拜觀するに及びて著るしき絢麗と優美とに驚かざるべからず、これは武者の群に交へたる美くしき女人といふべし。

かくてまた黒書院の西北隅より長廊を通りて最後の殿舍に行く。

白書院

將軍燕居に宛てたる白書院、二の間、三の間及四の間を合せたる殿舍を假りに白書院といふ、九十坪にあまれり。

黒書院よりの廊下は蓋し補修せられしものゝ如く、これを過ぎて二の間に出づれば、今までの金壁は楚々たる白壁に代り、水墨瀟々として繪に聲あり、上段十五帖、床は疊床にして其他脇棚、書院、帳臺の構作はすべて他殿に同じけれども專ら清洒の氣あり。脇棚、天袋小襖を除きて、四壁みな山水樓閣を描く、畫者は狩野興以と稱せらる。天井格の間には青地に金色の團扇形あり、うちに花鳥を畫けり、此楚淡のうちにありてたゞ袋棚小襖は、金地に瞿麥の優麗を以てせり、二の間十八帖、三の間同、結構またすべて一の間に準じたゞ天井裝畫を異にするのみ。

此御殿内外の裝飾は天井金具等の細に至るまですべて御紋章を附せらる、これ畏くも　明治天皇行幸に際して此殿舍を用ひられしによると承る。

四の間、雪持竹に雀の繪あり、其うちの一圖に「睡り雀」あり、二條三名畫の一として名あり。なほ東南に溜の間とも考へらるゝ一室あり、東方に昇降口を備ふ、裝畫なし。

かくて殿舍の拜觀を終る。

御苑

御苑は大廣間の西、黒書院の南にあり、小堀遠洲の作と稱せらる、元來花木を植えず單に石のみを以てし、だゞ西境に少許の樹木ありしと傳へらる、境外は本丸との區劃をなせる内濠ありて、これに有名なる櫓橋を架せり。御苑は約五百坪の大池を主とし、其西北隅より瀧を落せり、もとは堀川の水を引きしも、久しくこれを絶ち、昭和御大禮以來電動喞筒によりて内濠の水を汲み瀑布となせり。御瀧口は新舊二つありて現に瀧を落せる左方に、舊瀧口あり、いづれを正しといふ事を知らず。

御庭の石は殆んど南面し巨石みな南に集る、依て南方現に芝生のあたり、別に殿舍ありたるやに考へらるれども、なほ攻究の餘地あるべし。

かくて拜觀を終り再び東大手門をいでゝ顧みれば巽の御櫓は巍然として湟渠水靜なり。春秋いくたびか參進して實測撮影を終るの日肅然として　皇恩の鴻大に感泣す。

昭和七年六月

川上邦基謹識

唐門及御車寄

一　巽櫓
　雖宮外郭東南隅の櫓にして堀川通より見るを得べし、續きて大手門あり、正門となす。

二　唐門

三　同　詳細
　二條城二の丸南面の正門にして一に鑑石門の稱あり、瑪石上に建つ四脚門にして欅木地檜皮葺とす。

三　唐門詳細

四　同　妻詳細

五　同　裝飾一部内側左

六　同　　右

七　同　同　外側右

八　同　同　左

九　同　細部

一〇　同
　各部の彫刻は金銀五彩を賦して莊嚴を極めたり、(五)(六)(七)(八)は袖壁の妻飾にして獅子牡丹を刻み、(四)は正面より右に廻りたる妻(九)は其眞束(十)は柱上部を中心に撮影したるものなり。

一一　御車寄全景
　唐門を入れば一面に白砂を敷ける廣場ありて直ちに御車寄に至るべし、第一の破風を遥侍、第二の破風を大廣間とす、大廣間の棟なる避雷針を左より數へて四番目に聊か見ゆるは式臺の棟なり、御車寄右方昇降口あり、下り棟の端に獅子の飾瓦見ゆ。

一二　御車寄

一三　同　欄間正面彫刻

一四　同　同　左側彫刻

一五　御車寄欄間右側彫刻
　御車寄は手法ほゞ唐門と同じく其欄間彫刻殊に秀麗を極めたり、中にも正面蛙股のうちなる獅子の如き當時の名匠が苦心の作なるべし。

一六　内玄關屋根瓦獅子(左)

一七　同　　(右)
　御車寄右方昇降口軒頭を飾れる雌雄の獅子は、或は後補のものとも考へらるれど、姿態甚だ整ひて美事なる出來なり。

遠侍及式臺

（圖）

一八　遠侍及式臺平面

一九　遠侍勅使の間床

二〇　同　床脇袋棚小襖

二一　同　帳臺

勅使參向の節休所に宛てし所なるべし、遠侍の主室にして北面す、袍樹を以て裝飾ゆ、帳臺周圍欅は木地を用ひ、これを大廣間黑書院等に比すれば幾分の落付あれども稍簡素なり。

二二　遠侍勅使の間下段南側

二三　同　西側

上段とは欅木地の框を以て仕切る、南西兩壁面樅樹の繪あり、西側欄間には千本桔子に須濱形を篏して花鳥の彫刻あり。

二四　遠侍一の間より勅使の間を見る

前項西面の襖を開けば遠侍の一ノ間なり、これより勅使の間正面床を撮影したり。

二五　遠侍勅使の間障子

二六　同

障子腰張は金地にて彩畫あり、桃山の殿舍より移すと傳ふれどもいかゞにや。

二七　遠侍一の間東北隅

二八　同　東側

二九　同　天井

一の間は又殿上の間の稱あり、四壁竹林猛虎の繪あり、勅使の間との界及二の間との界共に欄間彫刻あり、天井は白地巖の菱に丸紋、圖樣穩健にして變化あり。

三〇　遠侍二の間東北部

三一　遠侍二の間北側欄間彫刻

三二　同　三の間北側

三三　同　東側

二の間三の間亦竹林猛虎の圖あり、殿上の間との界なる欄間彫刻は表裏圖樣を異にす。二、三の間及其次なる柳の間と三室を合せて天井を共にし、其間仕切には承塵上部に簡單なる彫刻あり。

三四　遠侍柳の間西側襖

三五　同　障子

遠侍口の間にして四壁柳の裝飾あるによりて柳の間と呼ぶ、障子は竪紫組子にて腰張あり襖に縫ひて柳の繪あり、構圖の巧みなるを見るべし。

三六　遠侍若松の間

三七　同　天井

三八　芙蓉の間

柳の間の奥に若松の間あり、四壁松の繪あるによりての稱なり、天井金地に菊菊の圖は他の諸室の天井繪が模樣風なるに反して構圖いかにも自由なり。其奥芙蓉の間あり。四圍芙蓉を描けり、天井竿樣天井。

三九　遠侍北側外觀

四〇　同　妻

北側、左端階段内は勅使の間、次いで遠侍一の間あり、右方間平戸の部分は式臺老中の間なり、大廣間の東樣より撮影す。（四〇）は（一一）に見えたる破風のみを撮影したるものなり。

四一　式臺　獅子繪杉戸

四二　同

遠侍より式臺に入るところ杉戸の西面に獅子の繪あり、其牡は所謂二

條三名畫の一にして「八方にらみの獅子」また「眞向きの獅子」と稱せらる。

四三　式臺の間

四四　同　　天井

饗侍と大廣の二殿を續ける殿舍の裏側を式臺の間といひ、其裏に老中の間三室を設く。朝武の使者公式の挨拶を交せるところなり。

四五　式臺の間より大廣間を見る

四六　同　　西側杉戸鶴繪

式臺と大廣間との喰違に杉戸たち、これを過ぎて大廣間に至るべし。

四七　式臺老中の間の一

四八　同　　二

四九　同　　三

五〇　同　　廣椽

老中の間は式臺の間の裏にありて三室相連る、將軍上洛に當りて老中御用部屋たりし所とす、みな竿欅天井にして北に廣椽あり、勅使の間に至るべし、（四七）の右方杉戸は、前掲（四六）の右方杉戸の裏面なり。

大廣間

五一　大廣間平面　（圖）

五二　同　上段

五三　同　同　床正面

五四　同　同　書院障子

五五　同　同　床脇棚及帳臺

五六　同　同　床脇棚

五七　同　同　同　小襖

五八　同　同　床脇違棚金具

大廣間は將軍上洛の時公式の儀禮に用ひし建物なれば、其内觀最も善美を盡せり、正面床松の繪、床脇棚は竹の繪、帳臺には錦鷄の繪あり。この帳臺の側即ち東側壁面一帶には大松樹を描きて桃山の氣分横溢し雄麗人を吞むものあり、床脇棚は上部袋棚小襖四枚、左より菊、芙蓉、牡丹、水仙を描き、其下違棚あり、金具は眞鍮金鍍金とす。

五九　大廣間上段帳臺

六〇　同　東側壁面

六一　同　帳臺内部東側壁貼

六二　同　南側壁貼

帳臺は黑紋橡朱房、其内部には風俗畫を貼れり、もとは花鳥などの繪ありしが、修理に際して他の襖張りを移したるものなり。

六三　大廣間上段西側壁面

二の間より上段西側を撮影す、右より床、書院、次いで東側に相對する大松樹を描く、いづれも戸襖にて中に明障子あり、下段との界は黑塗の框を以てす。

六四　大廣間上段天井付遠侍勅使の間天井

ともに金地に彩色更紗菱文。

六五　大廣間下段西側壁面

六六　同　上段より二の間を見る

六七　同　二の間東側壁面

六八　同　同　欄間彫刻

六九　同　同　壁貼孔雀

七〇　同　同　天井

下段即ち二の間の壁面は上段に續きて東側に大松樹と孔雀、西側もまた巨松と鳳凰とを描けり、三の間との界には欄間彫刻あり五彩を施して孔雀、牡丹、唐松等を彫めり、天井鶯青地に崩れ網の内花文あり。

七一　大廣間三の間北側壁面

七二　同　欄間彫刻

七三　同　壁張孔雀

七四　同　二の間西南隅より三の間を望む

三の間赤松樹と孔雀とを描き、四の間との界欄間に同樣の彫刻あり、表裏兩面圖樣を異にす。

七五　大廣間鷹の間西南部

七六　同　南側

七七　同　西側北寄壁面

七八　同　南寄壁面

七九　同　天井付黑書院三の間天井

四の間は松に鷹の繪を以て裝飾せらるゝより鷹の間の稱あり、南側欄間彫刻は（七二）の裏面なりとす。惣じて他の諸室に比し設色稍鈍重の感あり。

八〇　大廣間廣椽欄間彫刻

八一　同

御殿の廣縁には立面圖に見るが如く全部この種の欄間彫刻ありて各花鳥を主題とすれども皆其圖様を異にす、一々これを撮影するの煩を避けて假りに大廣間に於ける二種を擧げたり。

八二　蘇鐵の間

大廣間と黒書院とを繼ける建物を蘇鐵の間といふ。もと四壁に蘇鐵を圖せるによりての稱なれども、一時京都府廳舍たりし時造しく完膕して今は僅かに大廣間寄の杉戸に其名殘をとゞむる外すべて金無地の貼付に改められたり。

八三　黒書院より大廣間を見る

八四　大廣間南立面

八五　同　妻

八六　遠侍より大廣間を見る

（八三）は黒書院の南縁より（八四）は、南方の御平庭より撮影す、右より式臺中央破風大廣間、其左黒書院、この一帶の芝生は宣政頃まで種々の建物ありしやに考へらる。（八六）は遠侍の東縁より撮影せり、第一の軒は式臺、第二の軒は大廣間にして遙かに遠州作の庭園を見るべし。

八七　大廣間前御苑

御苑は小堀遠州作として名高し、もと樹木なき石庭なりしも近頃植樹して風致を改められたりと聞く、大廣間廣縁よりの眺にして右方瀧口中央樓樹のかげに中島あり。

黒　書　院

（圖）

八八　黒書院平面

八九　同　上段床

九〇　同　同　床脇棚

九一　同　同　同　小襖

九二　同　同　帳臺

九三　同　同　書院障子腰（左）

九四　同　同　同　（右）

九五　同　同　天井

九六　同　同　天井隅

九七　同　同　帳臺内部壁貼

黒書院上段床張付は柴垣に松小鳥、柴垣は床脇棚まで續けり、折曲りてまた棚あり蘭の繪を張る、袋棚小襖は共に樓閣山水圖なり、帳臺樓に山鳥の繪あり、大廣間に比し幾分柔か味ある裝飾を以てす。書院障子腰山水の繪を貼る、帳臺内部の壁面は大廣間のそれと同じく後補の風俗畫なり。天井向ひ鳥、下ケ壁の繪は承塵下部の裝飾に係らず山水樓閣を描けり、下段との界に無目鴨居ありて簾釘を打てり。

九八　黒書院二の間東側

九九　同　北側壁貼

一〇〇　同　天井

一〇一　同　上段より二の間三の間を見る

二の間は上段帳臺の裝飾に續きて豐麗を極め、櫻に籠を東側より北に折曲りて描けり、大體黒書院は將軍常儀接見等に用ひし所とて之れを大廣間に比すれば稍砕けたる所あるが如く從て其裝飾も雄大よりは豪華と見らるゝが如し。

一〇二　黒書院三の間西北隅

一〇三　黒書院三の間より上段を見る

壁面海邊松の圖あり、二の間との界欄間には透し彫の格子を建つ。

一〇四　黒書院菊の間南側襖

一〇五　同　西側壁面

一〇六　同　北側

一〇七　同　天井

四の間は共壁面裝飾に垣に菊を描けるより菊の間と稱す、承塵上部は薄に扇面の繪ありて全體の調子何となく柔かく華麗を極む。

一〇八　黒書院牡丹の間

一〇九　同　北側東寄壁張

大廣間より黒書院に入れば板敷の廣間ありて壁面に牡丹を描けり、牡丹の間と稱す、杉戸を經て三の間の南縁にいづべし。

一一〇　黒書院濡れ鷺杉戸

一一一　同

前記杉戸の裏に二條三名畫の一なる濡れ鷺の繪あり、本來泊舟雨鷺の圖なるがいまは雨も舟も消えて鷺の姿のみとなれり。

一一二　黒書院南側廊下杉戸朝顔繪

ぬれ鷺杉戸に相對せる杉戸に朝顔の繪あり二の間の外縁を飾れり。

一一三　黒書院外部

御苑背部より撮影せり。

一一四　黒書院妻

一一五　大廣間より黒書院を見る

大廣間の西縁より撮影せり。

白書院

一一六　白書院平面　（圖）
一一七　同　西立面
白書院は最も奥まりたる殿舍にて將軍上洛の際は其居室に充てたりといふ、内部裝飾は從つて瀟洒を旨とせり。
一一八　同　一の間床
一一九　同　床脇棚
一二〇　同　同　小襖
一二一　同　帳臺
一二二　同　同　上部欄間繪
一二三　同　一の間より二の間を望む
一二四　同　南側襖
一二五　同　天井
一二六　同　書院障子腰（左）
一二七　同　同　（右）
一二八　同　書院外部
一二九　同　同　西椽杉戸糸櫻繪
床襖其他の張付はすべて山水樓閣にして狩野興以の描く所といふ、他の諸殿の金壁かゞやけきに對し、この殿内は白地に僅か金砂子を蒔けるのみにて水墨の香ゆたかなり。たゞ床脇袋棚小襖のみ金地を用ひて賦彩あざやかに撫子を描けり。書院障子の腰なるは左より枯木、芦船、舟の四枚なり、湮滅見るに苦しむ。
一三〇　白書院二の間より一の間を望む
一三一　同　東側襖
一三二　同　北側襖
一三三　白書院二の間西側
一三四　同　南側椽杉戸
二の間また興以の山水繪を以て裝飾せらる。
一三五　白書院三の同西北部
一三六　同　西側襖
一三七　同　東側
一三八　同　北側
一三九　同　二の間及三の間天井
三の間もまた山水繪の裝飾なり、この東廊下を隔てゝ詰の間あれども何の裝飾なし。
一四〇　白書院四の間西側壁面
一四一　同　同　睡雀繪原寸
一四二　同　南側襖
四の間は雪持竹に雀の繪の裝飾あり、其一圖睡雀は二條三名畫の一と稱せらる。
一四三　白書院妻
一四四　大廣間東北隅より白書院を望む
大廣間の東北椽より殿舍の裏の方を一望したるものにて左より第一の軒は蘇鐵の間、次の破風は黑書院、最も奥なるは白書院東側昇降口の破風と大屋根なり。

御　苑

一四五　御苑平面

一四六　御苑より御殿を望む　（圖）

圖中左方室内の見ゆるは式臺、次なる軒は遠侍にして、軒下にかすめるは巽稽なり、また其右樹木にかくるゝは唐門とす。

一四七　御殿外部

正面遠侍其左式臺、最左端大廣間

一四八　御苑背部より御殿を望む

右方なる御殿は大廣間中央ひくき屋根は蘇鐵の間、左端は黑書院なり。

一四九　御苑　南方より見る

遠州作の御苑なり、石は多く南面し大廣間また黑書院より見るときは或は石の背面を或は其側面を見る樣なり。

一五〇　御苑　瀧

一五一　同　舊瀧口

瀧口は二つありて現在は大廣間より見よき方に水を落せり。

一五二　二條離宮南側立面　（圖）

一五三　同　白書院南側立面　（圖）

一五四　同　西側立面　（圖）

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

KODAK Color Control Patches

© 2021 Kodak. All rights reserved. TM: Kodak. KP127082B

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black